

本田安次博士を悼む

眞鍋昌弘

『本田安次著作集第一巻 日本の傳統藝能 神樂Ⅰ』は平成五年に、最終の著作集第二十巻、『日本の傳統藝能 祭・アイヌ・アジアの傳統藝能』は平成十二年三月に刊行されて、別巻総索引を残してこの全二十巻の著作集は完成した。本田安次博士（以下本田氏とする）の七十年におよぶ調査研究主要業績のそのほとんどが、改めて決定版として新たな編集の手も加えられてこれらの中に収められ世に送り出された。私はいまこの壱万三千ページにも及ぶ偉業を眼前に置いてこの追悼文を書いている。強靭で粘り強い研究者としてのはかりしれない生命力と、全国を視野に入れたフィールドによる徹底した実証という方法の確かさとが、まさに改めていま迫つてくる。

第一巻・神樂Ⅰの自序には次のように書かれてある。

この書に収めた長短の資料には、何れにも私の青春がこめられてゐるやうに思ふ。あなたの山かけ、こなたの海辺で見、聞き、教はり、或は語り合つた多くの方々の面影が—既に故人になられた方もあるが—幻のやうに思ひ出の中に浮ぶ。今は一々誌さないが、かうして縁を結んだ方々に、また、各種の誌上で示教を受け、御蔭を蒙つた方々に、今改めて厚く御礼を申し上げたい。

その研生活が、淡々と力強く積み重ねて行くことに徹底していく、しかも内容や対象が年々広がりをみせてみずみずしく展開していくのは、右に書かれているように、その青春の張りと土地の方々への感謝の気持ちを持ち続けられたからであろう。この第一巻とは対称的な第二十巻あとがきには次のように綴られている。

九十四歳の誕生日を迎へるこの二月に、最後の第二十巻を刊

行できることをまことに有難く思ひます。長きに亘る研究生活の総まとめもこれで区切りがつくことになります。（中略）これまでにどれ程多くの方々にお世話をになりましたことか、御支援、御協力、御教示を賜つた皆々様に、厚く御礼申し上げます。平成十二年彌生。

平板な普通の文章で書かれてはいるが、民衆の中に分け入り、その人々とともに手を取つて調査を続けてきたこの本田氏の、故意に文章を構えようとしないところにかえつて、その達成の自信と苦労が滲んでいるように思われる。特にこの二十巻をもとに「これで区切りがつくことになります」と漏らされた言葉は重いのであり、一方には客観的に芸能の真実とルーツの源を、その多くのケースにおいて突き止め得た安堵感も漂つているのである。

日本伝統芸能研究史において、この区切りこそが最新の結果であった。長い山道を登りつめて広々と四方の風景の展開が一望できるまさに高い峰であると言えよう。この峰からまたいく筋もの道が、広く緑な豊かな平野へ向つて緩やかに伸びてゆくという、研究史の象徴的な広がりと深まりが見えてくるようである。本田氏は自分の仕事は「なるべく後の人へのためになるようなものにしたい」と言つておられる。それはまさに蒐集できるものはいまのうちにと、常に実体をしつかりと歩くことによって掘ることを第一にして比類まれな峰を形成したことで具

体化されているのである。研究で大切な側面は多々あるが、ともかくここが基本であろう。日本伝統芸能研究史上、最も高い峰にも似た偉業を残して、つまり伝統芸能の今後の豊かな展望の土台を築きあげて、この平成十三年一月十九日他界された。享年九十四才。

言うまでもなく、本田氏が取り扱つた日本伝統芸能のジャンルは「神楽」「田楽」「風流」「祝福芸」「外来系・延年系（芸能）」である。神楽は、今日もっとも基本的分類とされている「巫女神楽」「出雲流の神楽・採物の神楽」「伊勢流の神楽・湯立の神樂」「獅子神楽（山伏神楽・番樂・太神楽）」の仕分けに到達された。田楽では「田楽考」の言説がすぐれていて、これによつて氏の田楽感や田楽資料の豊富さがわかると言えよう。またこの追悼文筆者からすると、氏の業績の中でもっとも興味があるのは「風流」（第十巻～第十三巻）である。「絵嘶風流花龜考」「太鼓踊考」「風流考」などが伝承・芸態・歌詞・比較に広く及んでいて、充実した考證であり報告であると思われる。「西日本に分布してゐる風流の主なものは太鼓踊であるが、東日本の獅子舞と同様その数はおびただしい。たま／＼世に知られずにひそやかに伝承されてゐるもののが少なくないのである。志ある人たちによつて今のうちに採録しておきたいものである」「中世歌謡の研究はこうした資料をぬきにしては考えられないであろう」とも述べておられる。このように風流（踊・歌謡）の研究にも先頭切つて活躍されたことは賞讃されるべきであろう。

現在の盛んな風流研究・風流踊歌研究の土台には、本田氏が大きくかかわっているとしてよいのである。

本田氏の業績には詳細な面での考察でも目を見張ることやすくぶる有益な事が多い。一つの歌詞の解釈という面でも、伊勢神楽歌の注釈「天文本神楽歌考」があつて、その中の、

いや大しやうたつてう河原にはや　いや大しやうわうこそおり給へやいやあつちもひめくり諸共にや　いや降りてや遊び給へ四季王子や（そらの遊び）

の初句の詳細な考察がある。この歌謡は『梁塵秘抄』（二六九番）にほぼ近いものであつて、その意味でもこの初句の考察は大切である。現在今様研究者は皆「大しやうたつといふ河原には」（梁）の「大しやう」を二句目にある「大將軍」から「大將」（大將軍の神）と見ている。しかし本田氏は「大じようそのものは、みかさ或は白蓋を指すものと思われる」「大上には最上のもの、貴きものの意あり、神のとどまる所、或は宝傘の意に用ひられたのではない」とし、神を迎える神樂の場に注目して「東北地方にはこの蓋をなほ（大じやう）と呼んでいる所が各所にあり、文字も、大じやう、大掌、大乗、大淨、大走、大場と書かれ、何れも神樂座の上に吊す天蓋を稱している」とした。多くの神樂・祭礼の蓋（真床覆表）の写真も提示し、神が降りて来る蓋、つまり神を招く目標としての

「大しやう」であることを述べている。また「河原にはや」とあるのは、「昔、河原で神祭りを行なつたことの名残であろうか」と結ぶ。「祭礼の大上つまり天蓋が立つてゐる」という河原には、大將軍の神様が降臨なさるのです」の意味となる。有力な一説である。このような歌謡の解釈の上にもその貢献は少なからず見えるのである。こうした面でももつとその御意見を聴かせていただく機会がなければならなかつたのである。

またこの著作集の中には「日本の愛唱歌謡」というのもあつて、奥羽地方の民間歌謡の秀作を選択して評釈鑑賞している一章がある。本田氏としてはむしろめずらしいものであるが、その始めに、こうした文章を書くのは「時代や地方にひそむかる名なき人々の隠れた逸作を発見することにあり、又各時代各地方を通じても歌はれてゐる歌に注目留目し、それらがかく愛唱をかち得た所以を味解せんとするなどにもあつた。事実、深く衆庶の心緒に触れ得た、又衆庶の理解の内にあつた歌は、記紀萬葉の古より實に今日に到るまで、或ひは歌ひなほされ、或は殆んどそのまま歌ひ継がれ、言語を同じうする境を限つて、すなわち、日本国中に流布愛誦されてゐたのである」と解説している。多様な才をもつておられた事がこのような部分からもうかがえるのであるが、思えばまことに、日本伝統文化さらには日本文化全体の繼承展開のために、専門的考究のみならず今後どのような現実的具体の方策を必要とするのかといった面

にまで及んで、さらに長きにわたって後学を導いていただきたかったと残念に思う方も多いことであろう。各地のまさに多くの善男善女も、自分達の伝承する芸能の一番大切な意義をこの先生から教わって、その誇りをさらにしつかりしたものにして伝承していくのである。

本田氏を偲ぶこうした追悼文は、本来その膝下で研究を続け、その日々の生活をかなり知る人によって書いていただくのがもつとも適切であろうと思われるが、本誌編集委員会からたつての執筆依頼があつたので、このような小文を書かせていただく結果となつた。しかし考えてみれば、こうした偉業のもとで、まさに多くの研究者が直接間接に恩恵を受け、その資料や学説に学び教えられてきたのであって、この追悼文筆者もその例外でないことは言うまでもない。まさに将来の新しい伝統芸能研究のための盤石の備えは、本田氏のお仕事であると言つてよいのである。

長らく文化財保護審議会専門委員として活躍され、日本国としての文化というものの理念形成を豊かな実証という方法で支えてこられたとともに、われわれの日本口承文芸学会・第三代目会長（昭和五十六年度・五十七年度）をも務められた。早稲田大学名誉教授。一九九五年、文化功労者。深く感謝しご冥福をお祈り申し上げる次第である。

（まなべ・まさひろ／奈良教育大学）